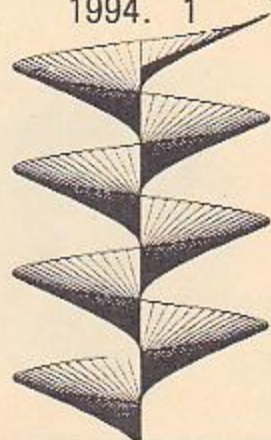


1994. 1



はるかにくす

No. 33

大阪工業大学図書館報

畏友から贈られた一冊の著書

土木工学科 教授 小林 和 夫



専門以外のもので、しばしば読み返している書物が一つある。それは、私と同様にコンクリート工学を専門とする、わが異色の畏友・九州工業大学教授の渡辺明氏著の「忙中閑感」(1989:永田文昌堂刊)と題し、4年ほど前に「忙中閑 四季折々の 独り言」なる句を付して送ってもらった随想集である。

その中の1、2を紹介することにしよう。

「文武両道の武将」では、次のようなことが述べられている。

西南の役の折、現地官軍から戦況報告の電報「ソククンハイソウシサツマタハコオフク」が届いたのを、最初は「賊軍敗走し、薩摩煙草を吹く」と訳したが、どうもおかしいとあれこれ試行の末、「賊軍敗走、自殺または降伏」が正解だとわかったのだそうである。

また、川中島の戦いの頃、武田信玄が上杉謙信へ、「杉枯れて竹たぐひなきあしたかな」と、武田の権勢を誇示した書状を送ったところ、上杉謙信はこの歌の濁点をちょっと動かし、「杉枯れて竹だくびなきあしたかな」として直ちに返信した由である。すなわち、「上杉が枯れるどころか武田の方こそ首がなくなるぞ」とやり返したというのである。

戦国の名だたる武将の文武両道の嗜み、ゆとり、ユーモアがうかがい知れ、興味深い。

近年、万事がぎくしゃくし、人間が余裕を失ってきているのは日本だけのことではないらしく、フランスの新聞ル・パリジャンの調査によると、

第二次世界大戦前のフランス人が一日20分は笑っていたのに対し、今や5分以上笑うのは8%にすぎないそうである。

ユーモアや笑いは人間の心のエネルギー源であり、社会の潤滑油であると言っている。

また、「新しい運命を拓こう」では、次のようなことが述べられている。

「運」とは確かに不思議で偉大な力をもっているが、「運」とはサイクリックなものだと信じている、いや信じることにしている。悪いことがあったら「また、いいこともあるさ」と思えばよいし、何かを失っても、代わりに必ず何かを得ているものなのである。いや、新しく得たものの方がはるかに大きい場合だって多いのだと考えているという。

不運の中にのめり込んでいくことの方が、不運に逢うこと以上に不運なことだと思ふ。もし不運に見舞われても、深呼吸してウェイティング、胸を張って立ち向かい、新しい運命を拓きたいものである。

以上の例のように、本書には著者の銘肝の数々が実に軽快なタッチで描かれている。渡辺一刀流の剣は、ニッコリ笑って人を撫で、返す刀で技術を裁ち、世相も斬っている。随所でツッパリの空しさを説き、肩の力の抜き方、シコリの取り方、そして旺盛な好奇心で意欲的に生きることの喜びを教えてくれる。私にとって「軽く読めて、実に重い本」である。

私の読書法… 《テレビ&読書》で理解力増進

電子工学科3年次 森田 貴



皆さんは図書館をどのように利用されていますか。やはり一番多いのはレポートや実験などに必要な参考書類の利用でしょう。しかし、図書館には専門以外のいろんな分野の本が沢山ありますので、もっと視野を広げるためにも自分に合った利用法や読書法を工夫してみたいかがでしよう。参考までに、私の場合の例を少しあげてみることにします。

中学生ごろの私は本を読まずどちらかといえばテレビのほうをよく見ていました。その中で特に印象に残っている番組といえば、NHKスペシャル（以前はNHK特集とよばれていた）です。科学技術、教養、歴史などをテレビの特徴である映像を使って一般視聴者でも理解しやすくそして興味深いものを、と考えられて作られている番組ですから文字嫌いな私はテレビを見ることによって本のかわりに色々と学んできました。

最近放送されたものの中で私が興味を引かれたものに、『ドキュメント太平洋戦争』があります。日本がなぜ太平洋戦争でアメリカに敗れたのかを多方面から客観的にとらえたものです。特に第三話の「エレクトロニクスが戦いを制す」では、産業技術の面から見て日本とアメリカとの間にはどれだけの格差があったのかを描いた

ものであり、工学系の学生としては大変興味深く考えさせられるものでした。しかし1時間の枠の中では全てを伝えきことはむずかしく内容は要約されたものでした。

そこで他にこのことについて述べられているものはないかと調べてみると、同名の本が出版されていました。その内容は放送されたこと以外に現地に取材したときの体験や、視聴者にわかりやすく伝えようとするスタッフの努力が書かれており、活字嫌いの私もテレビで一度見ているから、より一層詳しく理解することができました。逆に、もしテレビを見る前にこの本を読んでいたら、数頁も進んでいなかったと思います。

テレビから本へ、これが私の読書法です。映画を見たあとに原作を読むのと同じことですが、本に対して異和感をいだかず読めるというきっかけになります。1日のうちに本を読まない日があっても、テレビを見ない日はないと思います。その中でもっと詳しく知りたいことがあればそのときに本を読めばいいのです。

一冊の本が今までの自分の考えをまったく変えてしまうことがあります。そのきっかけが図書館にあります。



上杉鷹山の経営学

—危機を乗り切るリーダーの条件—

童門冬二著

(PHP研究所)

ここで紹介する本には約240年前の江戸時代における会津、上杉藩の藩主上杉鷹山が徳川幕府によって所領120万石を15万石に減らされても家臣団の整理を一切行わず、見事に藩財政を立ち直らせたことが記されている。

なぜ鷹山はその経営（行政）改革をなし遂げることができたのか。彼は、改革を妨げる壁は

三つ（制度の壁、物理的な壁、意識の壁）あることを示し、改革とは、この三つの壁を壊すことであると告げ、様々な方法でこれを実行した。これは現代社会にも十分通用し、バブル経済がはじけて経営の建て直しに鷹山の経営法を参考にする企業が多くなったという。

また、今年も、政府の減反政策と冷夏、台風の影響による米不足騒ぎなどが起り、今でこそ緊急輸入等で何とか対応できるが、江戸時代での米不足は即飢饉につながり、「天明の大飢饉」では多くの犠牲者を出している。この時上杉家では一人の餓死者も出していないといわれる。

鷹山は、豊作の年に余剰米を精米せず粃の

2188

ままま長年保存し、それを一斉に放出して民衆を救ったそうである。

アメリカの故ケネディ大統領が日本の記者団との会見で「あなたが尊敬する日本人は誰ですか」との質問に即座に「ウエスギ ヨウザン デス」と答えたという。バブル経済の破綻、リ

ストラ、レイオフ、人員整理などが毎日のようにマスコミで報じられ、景気が低迷し日本経済の先行きが不安な世相のいま、先達の治績を見直す意味でもご一読をお薦めしたい。

※ 配架場所：第1図書室（請求記号 289.1 D）

図書館情報 『イントロジー専科』

人生80年時代を迎え、余暇の生かし方に大きな関心が集まっている。

様々な趣味・娯楽を通じ、或いはライフワークや生涯学習を介して、十人十色、人それぞれの“生きる愉しみ”追求はいま花盛り。

これら“生きる愉しみ”に、図書館的切り口で迫る“イントロジー（入門学）”なるものは成り立たないか、とぼんやり思いつくままに試みたのがこの度の企てである。

まずは、その事始めに“山”を選んだ。

山 ぐちせんせいを 登る

さて、この工大で“山”と言えば、まるで語呂合わせのように即「山口先生」の名が挙がる。

さように、電気工学科山口健次郎助教授は、人も知る“山男の中の山男”なのである。

《奈良県桜井市の出身。高校時代山に憑かれ卒業してすぐに奈良山岳会へ。以来40年、地元関西はもちろん全国の名だたる山々を登攀・走破してきた実績を持つ。日本山岳協会の理事や奈良県山岳連盟理事長など斯界の要職も歴任、一方で国体の運営にも参画、幾多の功績を残す（平成3年日本山岳協会功労賞受賞）。本学ではI・II部山岳部の顧問を長年務め、現在も後進を指導中》

その山口先生にいろいろ話をお伺いした。

▶山のどんなところが魅力ですか？（との問いに）

「さあ、とにかく登れば心が休まりますよ」と終始ニコニコ顔。言葉は少ないが、どこか浮世離れしたたたずまい。なるほど“山”を

感じさせる風格が自ずと伝わってくる。

▶山をめざす最近の若者について？

「高校の山岳部などでよく聞くのですが、もう山は卒業したというヘンな達観。妙に老成した気風をこのごろ感じますね。シラケ世代というのは、山少年にも例外でないということでしょうか」と顔を曇らせる。

▶中高年者の登山も活発なようですが…

「高齢化社会を反映して山登りに挑戦される元気な方々も増えましたね。事故や遭難が多いのもこの層ですが」

▶イントロジーの立場から何かアドバイスを

「十分な装備や身体の調整はもちろんですが、“図書”との関わりで言いますと、地図やガイドブック（GB）には最近見やすく、良いものが沢山出てます。が、問題はその応用力です。例えば、GBにあるコースタイムは、あくまでも普通の天候下で順調に進行した場合の標準タイムです。天候急変や思わぬアクシデントで前提が崩れればもう通用しません。山では臨機応変な対応、つまりGBのみに頼らない“読み替え能力”が俄然不可欠となるのです」

▶そうした能力は登山以外でも必要ですね

「ええ、今のように情報万能主義が幅をきかす時代にはとくにそうですね。情報に含まれる陥し穴にはまらないよう心してかからねば…」

▶最後に、山に関する良い本があれば…

「登山技術に関するものは別にして、読み物として面白いものを二、三あげますと、

1. 深田久弥『日本百名山』（新潮社）
2. 本多勝一『山を考える』（実業の日本社）
3. 浦松佐美太郎『たった一人の山』（文藝春秋社）

〈注：分類番号291他。いずれも当館に所蔵〉

